Q
vol. 42
AUTUMN
2013

創る・育つ・観る ―こころ豊かな毎日を。

人まち結ぶ、
北九州芸術劇場の
情報誌「Q」

◎発行：（公財）北九州市芸術文化振興財団
◎北九州芸術劇場
北九州市小倉北区室町1-1-1-11リバーウォーク北九州内
TEL.093-562-2655　FAX.093-562-2588
http://www.kitakyushu-performingartscenter.or.jp

彩の国シェイクスピア・シリーズ第28弾

ヴェニスの商人

The Merchant of Venice

一作たりとも見逃せない! 残り10作品の佳境に挑む蜷川幸雄。

8月―「ヴェニスの商人」の稽古場の空気は、静謐で緻密であった。外の照りつける陽射しや重苦しい大気とは一線を画したムード。そこに居るすべての人々の神経の糸は蜷川幸雄へと繋がり、氏はその螺旋の糸を感性で受けとめながら何かを探っている。半世紀以上、演劇を仕事にしてきた氏でなければ創れない、大人の現場がそこにあった。

1935年、蜷川氏は、埼玉県川口市の鋳物工場が立ち並ぶ界隈にあった蜷川洋服店の5人兄弟の末っ子として生まれる。父は仕立て職人、店は母が切り盛りしていた。小学校の頃から母に連れられオペラやコンサート、歌舞伎や文楽に通い、絵画好きな父の周りには若く無名な画家たちが出入りする家だったという。高校時代には油絵を描いたり、新劇を観始める。文学座の支持会員になり、民藝や俳優座の舞台にも通ったという。絵画か、演劇か。迷う中で東京芸大を油絵で受験した。

「で、落っこちた（苦笑）。結局、絵を描くということでは自分の中のたぎるような想いをぶつけようがなくて。それが芸居ならもう少し生理的な苛立ちや熱をそのまま反映できるかなと。そんなときに安部公房の『制服』という芝居を観たんです」と蜷川氏。斬新な舞台に強く惹きつけられ、そのプログラムの後ろにあった劇団員募集の広告を見て思い立つ。「受けてみたらこっちは受かった。それが『青俳』という劇団でした」。蜷川幸雄、19歳の春だった。

俳優になり、30代で演出家となり、その後自らの劇団から商業演劇の場へと基盤を移していく。数々の傑作を世に送り出し、〝世界のNINAGAWA〟と称されるようになってもその歩みは衰えない。1998年、63歳のときには、出身地である埼玉の芸術劇場からオファーを受け、〝シェイクスピア全37作品の上演〟を掲げた企画『彩の国シェイクスピア・シリーズ』を手がけることに。それも今回の「ヴェニスの商人」でついにラスト10作品となった。御年77歳。未だ疾走し続ける蜷川氏の原動力は一体何なのだろう。氏の中にうごめいている変質しない「核」について問うてみた。

〔2p.へ続く〕

混沌とした時代、消滅してしまった希望を、作品の中でなら語れる。

蜷川幸雄氏インタビュー

Yukio Ninagawa Interview

小劇場の俳優からスタートし、演出家から商業演劇の世界へ。
さらに海外へと羽ばたき、現代日本を代表する演出家の一人として、
世界中から注目を集める存在となった蜷川幸雄氏。
77歳を迎えた今なお新たな扉を拓こうとする原動力は何なのか。
演出家として、人として。氏は何を想い、その熱を放出し、
半世紀以上にわたる演劇人生を歩んできたのだろうか―

文:重岡美千代　撮影:野坂茉莉絵

下手なくせにへりくつだけは多い俳優だった。

高校時代には新劇に通い、19歳で劇団青俳に俳優として入団。その後のアングラ演劇の潮流の中で「劇団現代人劇場」を旗揚げ。1969年「真情あふるる軽薄さ(清水邦夫作)」で演出家デビューした。

蜷川　入った当初から、「俳優だから裏方はやらない」とか下手なくせにへりくつだけは多くて、〝貴族俳優〟とあだ名がつくくらい小生意気な俳優でした。当時は芝居の動向なんかをよく勉強してたので、自分の劇団のやるレパートリーが恥ずかしくてね。僕は言うべきことは言い、やりたいことはやろうと決めていたので、あらゆることに異議申し立ててしてたんです。で、あまりにひどい芝居しかやらないので「俺を演出家にしてくれ」と言ったら、ダメだと言われた。宇野重吉さんや芥川比呂志さんのような名優じゃなきゃ無理だと。確かにそうだとも思ったんです。名優であるか大学で演出を学んだとか、その人を信頼するためのデータが僕には全くないわけだから。それなら今の僕でもいいという人と一緒にやろうと思い、現代人劇場を創りました。

演劇の光と陰 ジャックナイフ事件と、その後。

60年代から70年代にかけて、当時の学生運動や市民運動の思想を色濃く映し出した小劇場の舞台は、ある種のアジテーションを巻き起こしたが、デモや闘争が敗北を重ねるにつれ、舞台と観客との間に奇妙な誤差が生まれ始めた。その頃、蜷川氏は新宿のとある喫茶店で、若い青年にジャックナイフを突きつけられる。

「あなたは今、希望を語れますか?」

「俺には語るべき希望なんてひとつもないし、語らないよ」と氏は応えた。

蜷川　今でもこんな危なっかしい世の中で、希望なんて持っていたら愚かしいと思います。でも、作品の中でなら語れる。消滅した希望を作品で語るために、必死でいいものを創って届けたい。そのために今も努力しているつもりです。

演劇の影響力と創る者の覚悟を思い知らされた出来事。さらに疲弊していくアングラへの危機感―そこからの打破を模索し、蜷川氏は商業演劇の世界へと飛び込んだ。

蜷川　自分の中では、商業演劇で学んだノウハウをアンダーグラウンドに持ち帰ることで活路が開けるイメージがあったんです。ところが、商業演劇に行くならアングラには戻ってくるなと言われ、僕も意地になりました。1974年、日生劇場での「ロミオとジュリエット」が初めての作品でしたが、このときロミオを演じた市川染五郎(現・松本幸四郎)さんが実に素晴らしかった。声は凛々と響き、シェイクスピアの長台詞も鮮やかに全部覚えている。立ち稽古の初日、野に咲く草花を一本持って客席から登場するシーンでは、どこで採ってきたのか本物の雑草を手に現れて、そのシーンが終わると、観ていた人たちが一斉に拍手を送ったんです。そこから幸四郎さんとリア王、オイディプス王を3本続けてやりました。

ギリシャ悲劇やシェイクスピアへの挑戦。

商業演劇をやり始めたことで、アングラの仲間からは孤立。そんなとき、かつて小劇場での仕事仲間であった唐十郎から「唐版・滝の白糸」の演出を依頼された。蜷川くんの才能と仕事をしたいだけですから」というこの時の唐の言葉はその後、人を変え、国境を越え、さまざまな人々から発せられることになる。しかし、ギリシャ悲劇やシェイクスピア作品へ取り組む中で、氏への評価は両極に分かれていた。理解されないジレンマ。評価されないことへの不満。作品への自負。苦悩の時代だった。

蜷川　ギリシャ悲劇やシェイクスピア劇には、英語が母国語ではない我々には身近にならないレトリックがたくさんちりばめられている。それをビジュアルで補えないかと考えたのが、舞台全体を仏壇化してその中で物語が進行する「マクベス」や、女が哀しみを語る時に口から赤いリボンを吐き出す「王女メディア」の演出でした。何日も寝ずに、自分をギリギリまで追い詰めるとそういうアイデアが舞い降りるんですが、それで胃潰瘍や十二指腸潰瘍になった。医者から「もっと違うやり方もあるでしょ?」と言われてやってみたけど、10年くらいはうまくいきませんでしたね。

海外では日本に比べて自分の演劇がよく理解されたと思うけど、自分にフィットしていたかと問えばそうでも無く、イメージが足りなくなって論理的な骨組みだけのつまらない舞台になりかけたとき、ベニサン・ピットで「真夏の夜の夢」をやったんです。もともと別の会場でやる予定だったものが中止になって、自費での興行でした。それでも、バラの花を降らせたいから、とまったく知らないのに飯田深雪さんを訪ねて要らなくなったアートフラワーをもらったり。黒いビニール袋に細かくハサミを入れてかつらにしたり。そうやって自分たちの新しい美学を創り直した。その公演を観たプロデューサーに「一緒に仕事をしませんか?」と持ちかけられたのが「身毒丸」でした。

いよいよ、ヴェニスの商人。

95年に武田真治主演で読売演劇大賞を受賞した「身毒丸」は、97年には当時15歳だった藤原竜也で再演、ロンドン公演で大絶賛を浴び、今なお再演を続けている。そしてこの作品をきっかけに98年、「彩の国シェイクスピア・シリーズ」が始まる。

蜷川　シェイクスピアの有名戯曲の中で、なぜかヴェニスの商人」だけは自分の中に違和感があって、ずっとやらないと言い張っていたんです。ところがある日、「じゃじゃ馬馴らし」と「NINAGAWA十二夜」でご一緒した市川亀治郎(現・四代目市川猿之助)さんから、「こことここのスケジュールが空いているので、一緒に仕事しませんか?」というメモが届いてね。彼は以前から歌舞伎の手法で「ヴェニスの商人」を上演したいと言っていたので「それなら」とスタートした。猿之助さんは、「ロンドンで「十二夜」をやったときも大絶賛でいつもとんでもないアイデアが突然わき上がって来るから、今回も楽しみです。彼も私も相手を裏切らない、いいイメージを出し合いたいという競争みたいなものもあって。その程よい緊張感が楽しいですね。

「いじましくも、妥協したくない」―蜷川演劇の真骨頂

2006年には55歳以上を対象にした「さいたまゴールド・シアター」や若手俳優育成プロジェクト「さいたまネクスト・シアター」を立ち上げ、今なお疾走、留まることを知らない蜷川氏。いったいどこまで走り続けるのか―。

蜷川　実は、僕は若い頃からおじいさんおばあさんコンプレックスみたいなものがあって。本当に普通の人生を真っ当に送ってきた人たちの眼差しで自分の仕事を見た時に、俺の舞台は果たして耐えられるだろうか、とずっと気になっていたんです。それで、そういう人たちの劇団を創って、自分の芝居をこれまでとは違う目線で照らし出してみようと思った。そりゃあ自分よりも高齢で、実際特攻隊に行って帰ってきた人もいらっしゃるのでいろいろ大変です。でも、やっていくうちに何だか新しい演劇のスタイルが見えてきた。今春にはついにバリ公演を果たして、劇評も大絶賛だったんですよ。

これから、ですかね。あと何本やったら死ぬかな(笑)。でもまだやりたいものもあるし、今の若い人に見ておいてほしいと思う戯曲もある。60~70年代の作品は、当時の演劇を知っている俺じゃないと演出できない、という幽かな自負もあるわけです。歴史的背景や生きてきた軌跡が反映できる作品を、間に合ううちに早くやってしまいたい。だから、この3年くらいは忙しいでしょうね。

演出家になったばかりの頃は「人に認められない、認められたいというなら、認めさせりゃいいだけだろう」と、幾つもの企画を持って劇場の扉を叩いた。人生って、人のせいに出来る部分と、自分の責任による部分を見定めていく作業じゃないかと思うんです。自分がどうしてもやりたいなら、黙っていい作品を創るよりしょうが無い。守り抜こうと思うものは、どんなちっちゃなことでもいじましく守り抜く。そこは変わらないですね。

STAGE PREVIEW　北九州芸術劇場 KITAKYUSHU PERFORMING ARTS CENTER

提携 先行 P
シダの群れ 第三弾 港の女歌手編

心の機微を繊細なタッチで紡ぎ、哀愁の人間ドラマを描いてきた岩松了が初めて手掛けた任侠劇『シダの群れ』シリーズの第三弾。豪華俳優陣がヤクザの筋と世間の常識、人情、愛憎に揺れる男女の心模様を繊細に描き出す。

大ホール	12/21(土)	12/22(日)	12/23(祝月)
13:00	●	●	●
18:00	●		

○作・演出　岩松了　○音楽　エミ・エレオノーラ
○出演　阿部サダヲ、小泉今日子、豊原功補、市川実和子、赤堀雅秋、末吉秀太(AAA)
佐藤銀平、永岡佑、岡田力、足立理、桜木テン、戸井田稔、吹越満、小林薫
〈Swan House Band〉エミ・エレオノーラ(pf)、佐藤正治(dr)
横山英規(bs)、平田直樹(tp)、ロベルト小山(sax)
●S席¥9500、A席¥7500 ＊当前共通
■お問合せ　キョードー西日本インフォメーション
TEL.092-714-0159（平日10:00~19:00、土曜10:00~17:00）

◎会員先行 10/12(土)　>>P.07~　◎一般発売 10/19(土)

主催 P
NODA・MAP 第18回公演「MIWA」

NODA・MAP第18回公演は、まさかの"美輪明宏"物語。宮沢りえ、瑛太、井上真央ほか豪華出演陣で贈るあまりに不敵で大胆な演劇の遊戯にご期待ください!

大ホール	12/6(金)	12/7(土)	12/8(日)
13:00		●	●
18:00		●	
19:00	●		

○作・演出　野田秀樹
○出演　宮沢りえ、瑛太、井上真央、小出恵介、浦井健治
青木さやか、池田成志、野田秀樹、古田新太
●S席¥9500、A席¥7500、サイドシート¥5500(25歳以下¥3000、要身分証提示・枚数限定)
高校生割引シート¥1000(要学生証提示・枚数限定)
＊当前共通 ＊サイドシート・高校生割引シート共に劇場のみ取扱
＊サイドシートは客席の都合上、舞台が見えづらい可能性がございます
＊購入枚数制限あり:お1人様1公演につき枚まで
◎ S席・A席・サイドシートは前売終了。高校生割引シートは残席わずか。当日券取扱あり。

主催 P
ラッパ屋 30周年記念 第40回公演「ダチョウ課長の幸福とサバイバル」

撮影:木村洋一

女性からサラリーマンまで、幅広いファンを持ち、昨年、"ももいろクローバーZ"にはまるおじさんを描いた「おじクロ」で旋風を巻き起こしたラッパ屋が、今年もダサイけれど、ひたむきで憎めない、愛すべきおじさんを描きます!

中劇場	11/16(土)
13:00	●

●¥4000
○脚本・演出　鈴木聡
○出演　おかやまはじめ、倭木藤法、木村靖司、中野順一朗
三鴨絵里子、岩橋道子、弘中麻紀、大草理乙子
/ラサール石井、小林健一、ともさと衣/
岩本淳、浦川拓海、宇納佑、武藤直樹、福本伸一
◎好評発売中

STAGE PREVIEW　北九州芸術劇場 KITAKYUSHU PERFORMING ARTS CENTER

主催 P
中村恩恵×首藤康之「Shakespeare THE SONNETS」

写真:操上和美　衣裳協力:雅コウジヤマモト

シェイクスピアの愛の詩「ソネット」を現代の視点で読みなおし、絶賛を浴びたデュオ作品が待望の再演。繊細な感受性と豊かな芸術性を持つ2人のアーティストが創り出す空間に、デザイナー・ヨウジヤマモトによる衣裳が舞台をスタイリッシュに彩ります。

中劇場	10/20(日)
14:00	★

★アフタートークあり
○構成・演出・出演　中村恩恵／首藤康之
○振付　中村恩恵
○音楽　ディルク・P・ハウプリッヒ
●一般¥4000、ユース¥2000
＊ユースは、24歳以下・要身分証提示・枚数限定・劇場のみ取扱
◎好評発売中

主催 P
彩の国シェイクスピア・シリーズ 第28弾
ヴェニスの商人

蜷川幸雄の演出／監修で次々と話題作を披露してきたシリーズ最新作は、男性キャストのみで演じる"オールメール・シリーズ"による「ヴェニスの商人」。日本でも人気の高い名作戯曲を、歌舞伎俳優・市川猿之助を主演に迎えてお届けします。

大ホール	10/5(土)	10/6(日)
12:30	●	●
18:00	●	

○演出　蜷川幸雄　○作　W・シェイクスピア
○翻訳　松岡和子
●S席¥9000、A席¥6000、B¥4000
○出演　市川猿之助、中村倫也、横田栄司、大野拓朗、間宮啓行、石井愃一、高橋克実
青山達三、手塚秀彰、木村靖司、大川ヒロキ、岡田正、清家栄一、新川將人
鈴木豊、市川段一郎、鈴木彩紀*、隼太*、坂辺一海*、丸茂睦(楽師)ほか
*さいたまネクスト・シアター
◎好評発売中

主催 P
ダンスダイブウィーク
イデビアン・クルー「麻痺 引き出し 嫉妬」

日常の何気ない一面を巧みに切り取ったユニークなダンスが人気のイデビアン・クルーが10年ぶりに登場!今にもお芝居が始まるかのような雰囲気の中で、現代の音楽に合わせて踊り出す。斬新なようでどこか懐かしく親しみやすい、心くすぐる新作にご期待ください。

小劇場	9/28(土)	9/29(日)
13:00		●
19:00	●	

○振付・演出　井手茂太
○出演　斉藤美音子、菅尾なぎさ、中尾留美子
中村達哉、松之木天辺、原田悠、井手茂太
●一般¥3500、ユース¥2500
＊ユースは、24歳以下・要身分証提示・枚数限定・劇場のみ取扱
◎好評発売中